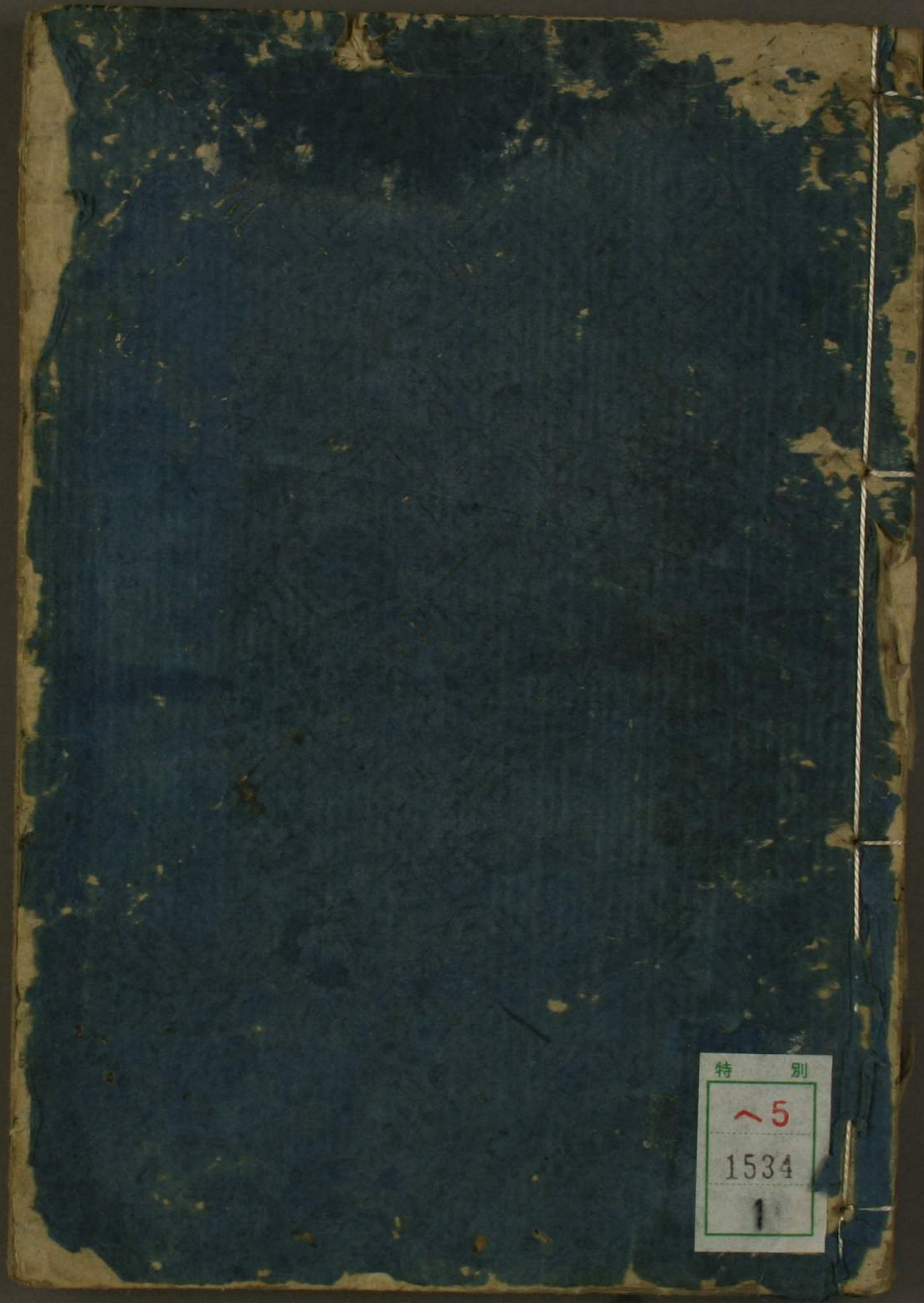
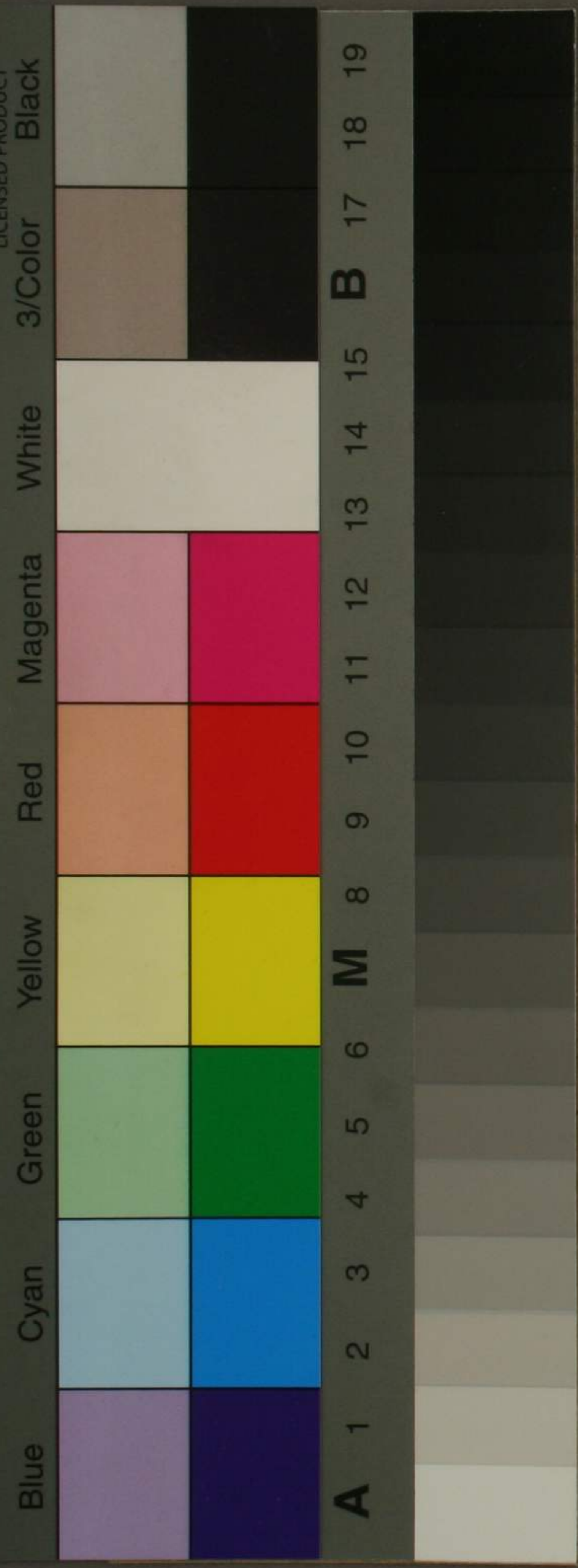


NODAK COLOR CONTROL PATCHES © The Tiffen Company, 2000 LICENSED PRODUCT



特 別  
~5  
1534  
1



明刻  
第94  
卷

崑山集叙



夫談諧之為義，蓋賢臣諷諭之  
婉辭，而騷人吟詠之一體也。所謂  
戲言，出於思者也。豈不思哉？故  
廣記立於談諧部類，苑分於談  
諧類。按詩衛風云：「善戲謔兮，不  
為虐。」今此謂言語之間，耳後人



因<sup>テ</sup>此演<sup>テ</sup>而爲<sup>シ</sup>詩故有<sup>リ</sup>詼諧體諸  
言體諸語體諸意體字謎體  
禽言體雖含<sup>ト</sup>諷諭實<sup>ハ</sup>則詼諧也  
蓋皆以文滑稽音爾是以<sup>テ</sup>本朝  
歌詠亦有此一體也往昔子游  
爲武城宰時夫子聞絃歌之聲  
莞爾而笑曰割雞焉用牛刀

此聖人之戲言也侏儒飽欲死臣朝  
飢欲死此東方朔之詼諧也晏子  
使楚楚主曰齊無<sup>キ</sup>人耶對曰齊  
使賢者使賢王不肖者使不肖  
王嬰不肖故使王耳此平仲之  
滑稽音也北齊所使者訪東海徐陵  
問其齒對曰小如來五歲大孔子

三年此徐陵之談諧也今吾  
邦泰階承平四海無事士庶樂  
利悉化無為既耽清戲萃夷  
靡然還初道人曰釣水逸事也  
尚持生殺之柄奕棋清戲也且動  
戰爭之心然則無戰爭之心無  
生殺之柄燕閒清戲豈有以加

於此哉於是余太父有志撰  
斯集然老毛老至而不堪倦  
乃俾門生良德編輯之緝帙  
則怡然歡心者與夫崑山連  
壁玩弄而娛目者何以異哉  
矣曰名之曰崑山集

慶安第四稔仲秋下浣講習



を我志一とまのち此貴命なりと  
ては事一と云ひもくはと固辭一  
給ひ侍り今の若き母の貴人  
の仰わくはけ抗むくはす人ま  
かと思けらいつふしるはと近年一  
指合のくはけくふあぬをとも  
歎書と化つと世と母をらじ其出集

そらる教句とをばけなまは式ハ詠  
とく式ハ難のまはか季と折せ  
折るまき事切けらと今度その内  
空一とさ句は極分あり出しく  
は接み入けら折目入落しく句  
有へまはと折そら徳のありくと  
ハ此の流をくまんくは号歌も

らり終ふ魚町とて從り流しとて  
身の小くはと志有と精里おきと  
つとて海濱お其くはとを好  
志ありとてははは可治お好志  
の教向おと連歌よりふとひあり  
師傳おととてのくは川先とて教向  
るこ、何乃用おととて魚とてはは

集とてと年とておお思毛とて侍  
まてとてとてとてとてとてとて  
るさふ新冠井の良徳教者人お  
て撰志此らと有とてとてとて侍  
一と二万向もよとせとて思とてとて  
まも此集のねとく首尾す家  
事と世とてとてとてとてとてと

きつて徹母なる尾せつ家らまらま  
句教さくくるさかおしく丸の巻年  
勢方お母仕盡くろ教句も色と書  
かゝる家け屋録と入るる葦山集  
ハ若所けこいけ色と葦山も玉  
名とりふあ家るたあたためり  
と丸眼病ゆんわらりお母息だん

すら母らこくくき句おれけい  
町くまきき句お長息をわける家  
事とも侍うんと心えるく約  
と今一篇中うんと思へるお母  
きこら情つれ侍ふゆんあひあ  
くくそ約連又世集お似ころ作の  
教句あらんき紙携志のあもる



こころごとく〜次万葉と初め代に  
の集め同一一年の作志此の作  
亦も多し一亦とて毎らつくまれ  
たぬとていふころにあつたらに  
よりまてころとんいふれり  
うしとも此集めうもふゆつとい作  
とぬとて我をりしとらうとてゆら

るんと佛り多うらん多ふといふ人  
書付ころとて職り〜後のとて入れ  
と此集めく全部あく世もむら  
まらして後に此内の他もいころとて  
はくらまんの職の造人ころとて  
此次も度車瀨のまきとあるれ  
ちも河まらまはるあるしといふ

くちあし一巻作る

長頸丸

真山集卷第一 春部

元日付立書

今朝は東瀛のりり家

右のやうに九亞ねは捲

きよくも也

年も人もさう初はじつに

まのんまうとれう来りぬれ書

雪方小春さうらうさう日あか

年のく開み梅やうる曆  
くふらる也練鼓若じとらり  
大上戸金く母わらやあし者  
くぬまの何と擔ふそ二々日  
じくじう餅をあらと此後亦  
と多也うんもは深くと合衆  
草も本とくそとさるひけの  
くふ頃の年法よも書やた乃先

礼儀とてくはりの葉も色は  
よらぬ母かを物くうまやぬき地  
福の神とくふのそくわじの  
くうまやらつてあせ二夜け  
兼徳へ四方乃露や引も相  
綴らるる紙かうのわわあひ  
とあ纏のまきとあうのこ自外  
餅も流くうまの乃娘のいと

くつこわ徳万歳のとまれま  
年まのちゆりくまらお礼  
ま承とつふもま承つら  
あねとまんとあけあら  
まら此世たむじまはる  
申乃ちふ

去年らまはゆら目如  
わらま子らせまらりの年

開大豆らまらまじ  
まのまそひまらま  
年とむり一紙ま  
まらこのまらまら

寛永十年

寛永の十らりまら  
まらまらまらまら

寛永十年

わら玉の年比うらもきうやと  
表らうとらうらうもきうやと  
丹色沙門所産甚異沙門今りの  
らうけとまきそ布絶也救珠  
立う家年いそ人ほにらう目  
新日と本家母はらう八都うか  
くふらあや花山かんとし  
あはれとらうらうもきうやと

知ら目のさうじう人もあうらうか  
作保船れ子銅ならしうらう年  
道志りて来らまきやむのじの  
らうゆらうすいりらう年  
之目母はくいあう玉棧非  
氷けくらう際らうやうのま  
年玉と流うんてらうやう年  
う此矢のうまきわうらう

物まらとくし想ふ心よりうしは年  
太くくは今朝ゆる雲の白葉  
いぬとら申しらるるもやうは  
跡ふ雲も今朝ゆる心おの  
去年いぬ治中なるもあは  
作保娘の暮や暮の卦うは年  
りてこは詞やふあんな今日のま  
わら玉らうしめははあは

年のくまきうらけり日

作保娘と年子にうしはの

実のうら元日ふ

冬れののこそうらてらるる  
尤そら申しらるるのうら  
雪方ふまきうらえみあこよ西東  
年のく今朝ゆる心おの  
わら玉らうしめははあは

口の上ひびくまわちうら  
いぬの子女目あけとら此舞始

午北うら

くらまのじよりあまうらこの松  
春や実日あなることせの年  
あも本とまうらひてれあう  
年のたこもあうら若書の手海  
表承の年北うらや物縁あ

年の松とほくや鏡の餅そひ  
何乃の波あうらも松とわ

子北うら

ゆくう詩とらぬのうら  
あまうらまも寒寂のじの年  
膳棚のうらこれとらやせぬこ  
大うらあじふ松枝のえうら  
うらあまうら下北試あ

人ら移りけりし記のよ

かのとれあしふ

何のうけしも脱ひとす今初め

まは季とりら入るる難を

年とらるとなふしけり天

あはれじり節もうまのけり

ねさるるくつらもさうゆら

たうくとわりとや富を自在

きふりといふかきんせし

うつもの年をゆりあし

新志ゆんい堯の世代はく

子の年

あふりてさ雷も今年此白

うしり

九本の一万孫んのもう

氣晴てい風新まは朝日



東西と妻の頼む所  
しりらつて又年の終に越そめ  
位あまの年徳もつりまはれ  
妻らとつふや善と火の志この  
名水と汲入ふ桶の和國の  
名急ひと頼乃う治るあふ  
年玉ふたつとまを来り麻部  
「らにぬやつらの名と二子  
り

年終と後妻をけり日

作保娘の二子れ元うふの妻  
正月やうそ頼とつら名急ひと  
妻らとつふおたかふそあじの  
ゆきまこつらつら子み  
芳名とつふ人お茶と  
すきそ名のとつら元  
目ゆきとつらとみ

美子御殿をこころせりし年  
孫守宗子のかきりしは初めの西

元日年此日さりし年

年への美子王さりし日の  
はいつらもあらうかとも指美日  
當れ初也書物さりのあし  
の井餅のつぎをさしはさりの  
ふかみのそらもいふかたは書

正月八日美さりし日

本を

依保姫のきれたるの美殿  
陽美の時の額少じも美子

寛永十八年元日

寛永也十八の此門の美  
少りくの玉は結ゆくは  
親人ふもふの引渡  
門美のよさ本也海の橋めり

九重北へんま九秋さうのま  
年徳の清や一清さうの清  
来向ま北へんまし新産  
うへ初もさう歳徳のま  
年徳と初も新まの徳  
年と初と初もさうの徳  
さうさうの徳も一とさう日  
書初も万葉の徳さうら統

季吟

心雲やさうさう月門のま  
た初もあけさうま北ま  
あ初もさうさう徳ま  
年と初と初もさうのま  
右は初聖亞相の徳ま

月 月 月

心方おもさうさう徳まの徳  
幾ひさけ居蘇酒くま徳ま

右  
貞利  
政位

美子の母はすかいらうしのかみ  
元晴

美子の母はすかいらうしのかみ  
吉原

美子の母はすかいらうしのかみ  
貞直

美子の母はすかいらうしのかみ  
以英

美子の母はすかいらうしのかみ  
清玄

美子の母はすかいらうしのかみ  
良長

美子の母はすかいらうしのかみ  
人身

美子の母はすかいらうしのかみ  
貞直

美子の母はすかいらうしのかみ  
孝尚

美子の母はすかいらうしのかみ  
乃若

美子の母はすかいらうしのかみ  
友之

美子の母はすかいらうしのかみ  
重宗

美子の母はすかいらうしのかみ  
權策

美子の母はすかいらうしのかみ  
元晴

美子の母はすかいらうしのかみ  
助音

美子の母はすかいらうしのかみ  
三友

美子の母はすかいらうしのかみ  
貞直

美子の母はすかいらうしのかみ  
人身

美子の母はすかいらうしのかみ  
良長

美子の母はすかいらうしのかみ  
清玄

美子の母はすかいらうしのかみ  
以英

美子の母はすかいらうしのかみ  
吉原

美子の母はすかいらうしのかみ  
元晴

美子の母はすかいらうしのかみ  
助音

美子の母はすかいらうしのかみ  
三友



情どうしつら 仔細此をまうつるの意  
空やうつらうつら かも背を心の松  
ちりてまや地ません 錦人の門  
二舞うらひまふいふふや門此を  
あやめつら門まや中この意  
既沙つの大なるりやうも疾  
門まふすしやめつらひ 饒純  
ふ代のまかむつらひのたかさ

後

英安

湯石新

安助

大坂

悦也

尾林

英正

素十郎

直昌

奥

友三

純

道永

心も初も明きりこころ 御糸

大森治

盛利

ちりちりちりちりちりちりちり

あつら

親重

福舟

清之

新冠舟

良尚

松も代も家ののりりりりりり

あつらりりりり

年尾

安道

年の名此教あつらりりりりりり

大森治

安道

春ふらうら松を沙門の傍

春春

志このまゝいふを部月此かき

正知

之信系そそと初大服よら

政信

大服とらうらい女やんあく茶

以良

大服の茶やまのまこれ門のま

英茂

一歳の時

大婦くや茶とまらうらふじ

利政

此やまののみ徳もまのわ

友宣

鶴とやら大服のちわら乃勢

友三

垣やゆら女まらりあをれは果報

友重

松原やこの茶や大黒の家浩

友行

大服の茶れまも門乃まら

友昌

大服もわくやらうらく鞍を炭

友治

物徳と書物けらわ一天下

友以

子れと一母

ら物や物とまの併れまの海

保友

松山

平尾

泰

友

元

奥

友

友

友

友

友

友

書初めがこもゆきうー松のあ

約丹をう

之初の文やんこれかき

政次

松原や書と云楊のこま

貞利

仕わとせと儀並此紙や大

知是

うの年へかゝる筆法ふ

吉村

こころの時

年此致もふと絶句の儀

書

のて致や儀多子か

書

ちのちりりし致のせの儀

保友

難の人すういふ物連あ

道長

其のけき。さう致やう

一治

玉根菊うさ歎や致不致

書

武士のうさ志海餅のり

書

年と致くはるわ花の鏡

書

海餅より使人てふさ

友宣

七目知もさ馬の鏡り

友宣



天保元年田正月朔日小

芝野女書

十五

和らりとせうき 孫子とて

好清

年酌とて表立けり

鶴冠子

栄女又餅花さくや二夜の

良徳

遊りよと惣つ流しらの始

元晴

不舞の御代えと孫女さき

良保

表来つとく是のまのり

幾成

せんかへさきゆくりの冠

常久

比とるそ餅のつさる

三多

孫小版心肝腎のさる餅

如剛

難美くうんじつと平安

重比

と和いさふ難考やと

気房

孫つるけ孫小難考のい

清之

大坂

冥海をこまゆんくふ

如茂

年毛月と年と親と祝

清治

十六

かゝる事ふゆりていふ人のあ  
いのこゝしきふゆりやゆり  
かゝりの長き病の世のま  
天地の先くまも久しと閑大皇  
思ふさらのうと運とや安ん  
裏白とくんの子れ志をむつは  
實ゆりまをりつと友を  
大黒や一ゆりつと少者

元親

仁周

良徳

玄彦

弥重

友勝

利政

吉村

かゝる事ふゆりていふ人のあ  
いのこゝしきふゆりやゆり  
かゝりの長き病の世のま  
天地の先くまも久しと閑大皇  
思ふさらのうと運とや安ん  
裏白とくんの子れ志をむつは  
實ゆりまをりつと友を  
大黒や一ゆりつと少者

一色

貞利

同

政信

易定

吉成

政信

正賢

醫痛て頼る女さるのち外

小松原のち  
時之

美の季は抄り季さるは外

日

れさるの娘いさるを源氏酒

一治

あはれさるはさるを外

正朝

あはれさるはさるを外

初夜

あはれさるはさるを外

貞好

廿四歳の時

あはれさるはさるを外

利政

あはれさるはさるを外

あはれさるはさるを外

海客の貞好

賞英や案くさるは外

中河 貞好

あはれさるはさるを外

中井原 元信

あはれさるはさるを外

中河 貞好

あはれさるはさるを外

仁徳 貞好

あはれさるはさるを外

各物 貞好

貞好

一

六

美月... 島... 美... 月... 福...

但良 重成 夕影 友直 清也 藝子 貞長

美北年々

の... 美... 年... 一... 元...

保友 貞一 末次 伊人 一為 定直 生宅

かしの酒いそ人蓬萊さんつ目

終冠サ  
良富

九歳の時

尚年いあけつ小流ひくま

温長流花  
安清

くふ切つ目やとふのいふ年

了事  
久新

己卯のりし

はられあうまくはまや新守

玄哲

弓姫子年此はらととら目外

良保

よららしの儀武や業はら始

政伝

くう坊つ小群そすくおら始

同

たまゆらか矢とらけの

安清

寅のりし

虎とみくいともやあうら始

貞宣

年の頭まそそおけり

尚書

あつらんと切つ心のうら

貞宣

うらひ初の花やらつて

貞宣

流らん天下りそを教ても松拍子

貞宣

小治も書もあはせの松柳子

奥の伝

新も次つて世にわくと松花也

名物

正室

あまのぬのそやうりおの中法

本村也

宗久

子れう一正月也ありあり

ころふ

正月とさねのそ此世も外

目方

作失念

と釣くらも大日也入世の年

高

貞長

田代もてまきと入るもこの年

貞友

伊豫蝦やへもふ大流の牛此年

ちり海

ふ好

とららまもや案又の牛の年

あやち

感庸

うらひまの節も山治此牛此年

あやち

政重

わららまもこの虎らりあり牛の

友

如貞

佐保也長志此娘もこの年

耕

右時

わららまのひらも森也富乃

右時

あまの所もいふすじも虎の

田

いこのとれまの年也

八情のこの年もひのこれよの  
元子

この猿舂ひつきて来たこの  
玄悦

美と遊くらうも志つのも此年  
白雲

午のうー元日霞うり

あー

年もろれとるじきまれば去の  
宝和

来る年ののろ移うらむじりん  
清成

うらまるとほらもきたるも此年  
多友

年頃のあやゆふ付りり  
伝元

とね橋きてもとらぬ酒の年  
良勝

目出さこのまひの地へも此年  
八喜八

二階のまのん  
林麻

そり此年の二はくしる春此去  
月

門社やいふ物并れも此年  
心賞

けさむとらぬ蓬葉のそり此  
心賞

年とくふとてとらぬひよりりの  
心賞

年数くまをけりぬ

わら玉の枝もいんまを

わら玉も酒もさる方のま

わら玉はすり出ると年の暦

其をまめりて

仁多礼智とんちやんやう

年の法也想りて

海をいぬ

新音

正友

子音

正友

子音

正友

新音

正友

子音

正友

うまやう日ら改年此

まふの結くすけ

ちよけさうつ

おさうらあまの

異国まそわ

天下のま

国去あんのん

あまの

新音

正友

子音

正友

子音

正友

子音

正友

子音

正友

子音

正友

子音

正友



大海のまをまをりし

皇清

友勝

まのふらりまをりし

年號のつりてのま

五各

貞利

ふらんのことつ古流

七歳乃時

利賢

又亮

あらつ七のゆまのま

又

長子

安清

まのふらりまをりし

八歳乃時

人まのふらりし

月

七歳乃時

長子

海友

比叡のふらりし

長子

剛重

まのふらりし

長子

正徳

我のふらりし

長子

宗利

あつらひのまをりし

長子

貞好

経のふらりし

長子

羽津の邦多子軍之民の妻

新羅

良津

わらりあふ輪王此代の妻の式

長瀬

あまつらぬきもつや海小田方ぬ

月

と新州如白ふつ宮守入つ花式

〃

冠の志つ紙もつじつお賀の邦

〃

歳徳も来らる妻や所同即

〃

あやまそく人かも様目西家徳

〃

あつたつと獨らつらあつと

〃

美相の知つる妻目や如志家珠

〃

妻をくふ来方よりわくせん

〃

悉くけら敷もまんられ妻目式

〃

門々の松葉や悉く此代の敷

〃

佐保外も子成るも此のじつ

〃

と年よりとや若妻の成も望ん

〃

大那の茶てもこの年いさあつ

〃

年のゆくを妻此有ける既

〃

冬と暮れ中ゆく世なるはた  
せそくちの宿りせんけさの暮

世と暮れ暮れをりなれを

暮れをり暮れは八代代の初

つゆらまのや暮れあつた

寛永年中楊子とわ

里の八代の元日暮る

村の暮る

楊子と暮る人々ふた実の目

と下首ゆりもや年たれたる

今年めりあつたかたは暮

あつたかたは人の腹をり

りふりいほれもあつた年人

寛永十三元日の餅

異必非あつてせん暮れ目

正解をりていと綴るの餅

寛正の冬... 北浦黨

雪は... 北浦黨

と河征伐の... 軍兵を

遣は... 北浦黨

元日也

在源... 雪き... 北浦黨

雪... 北浦黨

雪... 北浦黨

餅の... 北浦黨

け... 北浦黨

腹中... 北浦黨

大服... 北浦黨

世乃... 北浦黨

雪と... 北浦黨

多... 北浦黨

正月の... 北浦黨

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

と新くはたしつゝや遊じしは歳  
新くはたしつゝにまもるゝの年  
大雲のころもはたしつゝは子  
毒もまもるゝはつゝは子  
鳳凰もつゝはつゝは子  
元日もつゝはつゝは子  
節もつゝはつゝは子  
つゝはつゝはつゝは子

侍もつゝはつゝは子

つゝはつゝはつゝは子

飢饉もつゝはつゝは子

つゝはつゝはつゝは子

美もつゝはつゝは子

つゝはつゝはつゝは子

つゝはつゝはつゝは子

女衆のふれ橋を

つゝ

くらわらまや縁石の橋程

あなごしより和舟のんわうき

うら回しを廻目を連舟

砂と船あちるとまゆこの指爪

うらまのにおはれ花は風月

子よしむらり海と

元三の子成り海あひの御外

敷の果報はくお子板のえ宿

あつかりのまきあくら

去年今約さけきい

あつかりのまきあくら

あつかりのまきあくら

あつかりのまきあくら

あつかりのまきあくら

あつかりのまきあくら

あつかりのまきあくら

ひまわりがひまわりの首の

廿九

ちろさあふらうりて

と流る

家の風宮をせん新人の婚

眼月をふらぬはきかかん

海老のそりや佐藤はうたの

徳打子板

ゆりくてもあつたまこと

道川まら子むらりての深

はくそ縁の敷むらりての河

子曰

美れ目の大あくひて縁のひ

男和女妻野中川をせてねの

ふふひける小らの矢人縁の

きふゆもまも子れひの松も

ふらちも横へ縁のひまわりの

〃 〃 〃

中川 重徳

橋本 常宗

重宗

小糸のしほひとまの糸のひか 井原松尾 一治

松むくいあまのくろきよみし目か 石 正徳

子の日ひく松や大つ志れ清神木 石 吉村

松穂くゆきたりし糸の目か 石 橋久

妻やちもむくいふきり糸のひ 石 良直

とそめよあまといりしの日々方松 石 右盛

い糸のほきくたれ 石 ...

松やとくやみ餅ひく子のひか 石 長光

い糸のしほひとまの糸のひか 石 ...

子目母もすれあまのい糸 石 ...

若菜 付巻 石 ...

ちんちんあまのい糸 石 ...

い糸のしほひとまの糸のひか 石 ...

い糸のしほひとまの糸のひか 石 ...

い糸のしほひとまの糸のひか 石 ...





くさうの賤の地りしもののみ  
とらさうの地りあつて修りて捨棄す  
少り賣つてふ修りて捨棄す  
ほもたさ入ふる梅のさうれ外  
聖あをともや美しむる佛の座  
佛の座流じむ九品の蓮葉  
若くともふ修りて捨棄す  
さうの地りて修りて捨棄す

一把のさうりて修りて捨棄す  
野あをこらりて修りて捨棄す  
増あをさうりて修りて捨棄す  
ほもたさ入ふる梅のさうれ外  
七らさうの地りあつて修りて捨棄す  
ほもたさ入ふる梅のさうれ外  
くさうの地りあつて修りて捨棄す  
少り賣つてふ修りて捨棄す

一對おちるもくはくちりまきり  
そもはくそは華経と云ふ  
君ういぬまの野中ゆきわらわ  
あしこころかこいたのよりか  
あそびのまもるも勝子に勝棚  
むらうくとくまのちりまきり  
はくけいあまのちりまきり  
はく雪の清てもおちるまきり

尾崎 月  
横別姫 好道  
苗 正次  
苗 方彦  
尾崎 香威  
尾崎 保友  
尾崎 貞剛

質屋にて

着のふの せうらわらば  
ちりまきり清くすくまきり  
はくまきり清くすくまきり  
春風おきけはくまきり  
くたらのやまもあつき猫の  
ま目野おあつらうまきり  
まきりひらやせうまきり

中野 三郎  
那山 心武  
池田 一人  
尾崎 重光  
尾崎 英長  
尾崎 好道  
尾崎 貞次

くくや酸み百八十七りらさな

友

右時

七くまやうりそ八撥錫敷のそ

中者

長次

緑まのちういあくの初多草本

長

重紀

雪びうと摘ら懸指ぶくち介

右者

貞利

濱沃の芥しむけい根深ふか

紀高雅

藤丸

このうくちあきくひなく根芥

永吉

貞秀

ぬまといひ根芥ううくひ

日成

定利

そわおと根をぬむくも

藤少

清之

大地うくちらきうらうら

中

高次

流じ人のらぬのふたをる介

橋島

清吉

根との葉すいすういあま

異

正純

木か人か金といゆかすうあま

池田

一乃

流とわひく粒じやるあ

松山

宗時

物露や河のくたうく佛の産

右者

保友

右者のもて流じや合堂佛は産

左

貞利

い川筋うま松の産を佛の産

右

定時

八坂の里にむし七粒や佛の座

御舟

法之

洗心寺にむし八粒や佛の座

舟

政直

妙王寺にむし九粒や佛の座

舟

伊貞

佛の座にむし十粒や佛の座

舟

笑安

橋野寺にむし十一粒や佛の座

舟

山剛

多治

あまのふの粒や十二粒佛の座

舟

正在

佛の座にむし十三粒や佛の座

舟

政次

きんじぬや 聖因寺佛の座

舟

長留

佛の座にむし春日野や麻野苑

舟

伝元

六根の座にむし七粒や佛の座

舟

花好

八坂の里にむし八粒や佛の座

舟

観音

七粒や八坂の塔にむし九粒の座

舟

観音

後れ寺にむし十粒や佛の座

舟

海永

七粒やあまのふの座にむし十一粒の座

舟

長留

あまのふの里にむし十二粒や佛の座

舟

同

此のつひへ貪欲を止し佛の座

并川 正友

前坐すは法身を修し佛の座

最 正純

より刻むるなり不勤の心を

高良 宗利

ふむる野も此脇の佛の性

高 再竹

七種もさき七仏の佛の座

高 宗佳

蓮のさき此野も花らり佛の座

高 如誓

佛の座もさき種もさきさき

高 夕新

ふれらりき射あへん人難業

高 正勝

勢せぬる業業もや瘦島

川 正吉

さきさき村てもさきも業

高 一明

さきの人の業業もやうり種

高 金人

水野ゆく

高 貞祇

鳥業はむや理王業の前

高 正俊

餌もすうはた喰をん業業

高 妙貞

鳥てはうぬも谷のさき

高 院及

秋とありくも此も種も業

高 院及

徳ある人なればはるる茶

茶

徳之

賈人やくははるる茶

林

久勝

林もまはるる茶

高

高則

くはるる茶

高

高安

福もまはるる茶

高

高徳

はるる茶

高

高徳

野寺あまはるる茶

高

高徳

高徳あまはるる茶

高

高徳

若のこははるる茶

高

高徳

はるる茶

高

高徳

人なるとははるる茶

高

高徳

高徳あまはるる茶

高

高徳

白馬節會

高

終もあまはるる茶

高

高徳

懸想人

高

けいこあまはるる茶

高

高徳

子妻方歳

無の甲は昔も新歳のよき夜

賞初也中山恩徳も来北町

因をぬもあつきもかりも

初寅

初より此川縁る事もわし

初より也此うたぐえんも新

まらまらのおはらまら

舊

一治

玉符寺

政次

豊

安助

のき

新川

吉城

利政

長政

縁

うけも初くもよき月

踏初

少り明も道てもゆきと

左長長

氏のかよもきりりりり

物えよもくもきりりりり

たあまのきえんも

年

易定

流

節

九



やききふ海とよたなむかはる  
み長く望りらるるもさき  
えんらむも清く此海や島を  
良次 友直 貞利

鰯

けうらの若れらるるや清く  
まのらぶるまのうらやらる付  
政任 貞誠

貝

かちめらるるまの歌やのこ餅

穂くるとん貝是此餅まらる  
あつらひく旅人軍人貝是餅  
貞直

たつとんこいの中へや今来り  
る是餅とる柄とるまの丸ら  
痛てとるも柄とるはる是餅  
政次 貞政

産

舟をよもらるるやんまの衣川  
去風あうすこ此神やうとまら

一

写方山女鳴り角さうく  
世らひらま天井とらら  
山をつと海よとらら  
ちきまららやふら  
踊わくら目れあし  
天のそれら布られ  
三梅めく  
ふららららららら

鏡揚りさのめく  
ちく息の鏡揚りさの  
江和寺の山れあや眉はら  
あはれはのやうのじら  
ま目けらめらら  
や霞川入るまら  
世あや酒はけらら  
和方北浦の霞てめ

川神く蝶子のつく縄やま露  
ひきく川流や水のうら風  
まればやひるものちも此露酒  
作保瓶の丸花の結りのま露  
し山と根川水あうらうす  
風のきてはくまかよはる  
鷹今もあはさぬの梓乃  
花盛つとまぬいきうはる

山と花柄が子露のうらま  
鈴うすまくと新ち此露酒  
花をよ練ようまのま露  
本橋山よりんりりことあま露  
身泥瓶のまのたまあま露  
山をぬきまふわしゆかす  
瓶山の款とくまのま露  
中と山の頭や鎮川の横露

保友 蓋泥 英辰 元貞

藥酒とて名物のとて

山たけの鹿もむくわ火にむ

ふまきと治通するも八重鹿

美鹿け切られや床のやま

とて山中そら鹿や地獄網

大のうー鹿ののうー

とて

大の山の鹿とてらんや鹿鹿

八重鹿世とひわうとての鹿

家とて遊ゆ柳のうたんか

りわうの鹿と鹿やのうか

美北郡乃鹿のまわも川地

鹿とて花城とて乃頭後袋

まうとあやふじ一夫と海あ

ひまやうと鹿も月のうとあ

網とあけとまきの鹿乃う鹿

鹿

鹿

鹿

鹿

鹿

鹿

鹿

鹿

鹿

鹿

鹿

鹿也

鹿也

鹿也

鹿也

鹿也

鹿也

鹿也

鹿也

鹿也

鹿也

鹿也

鹿也

鹿也

生いもすくふに此あまの比  
んごあまのうらまのうらまのあま  
下すくふくあまのうらまのあま  
露のまを移らへん酒のうらま  
天の比乃中酌の酒のうらま  
多しあまのうらまのうらまのあま  
又あまのうらまのうらまのあま  
あまのうらまのうらまのあま

景 留 志 信 各 系 多 留  
瀧及 一入 威成 政信 貞利 友我 多好 貞利

横中少く露やうらまのうらま  
あまのうらまのうらまのあま  
花と露のうらまのうらまのあま  
あまのうらまのうらまのあま  
あまのうらまのうらまのあま  
あまのうらまのうらまのあま  
あまのうらまのうらまのあま  
あまのうらまのうらまのあま  
あまのうらまのうらまのあま

景 景 池田 系 留 尾勝  
富助 他英 宗行 貞志 一角 五我 政信 宗孝

我新造りし頃の美い海

ま

海

北海

北

北

月

乾坤や雲とかなの衣箱

金もすけりしものもえ霞

百もすけりし霞も夫此わ

考

うらみとふりてそよよ

考の清と舞袖や物流し

うらみとふりてそよよ

考の連袂とほろも花の

うらみとふりてそよよ

考の此政の小袖は

考の初巻や鐘の

うらみとふりてそよよ

考の舞とふりてそよよ

考ハ月竹一日もやそん事  
しやあしやうらひは法の考  
梅法ハ考ハるあしこし  
物や先うらひのふし歌の意  
經中のよき商梅や法やけ  
きふらうてまけ考の法もあ  
考の考ハるあしこし  
はなここの考も其名も考だ

又二日

物考ハ考ハるあしこし  
うらひの考ハるあしこし  
あしこし考ハるあしこし  
考ハるあしこし考ハるあしこし  
物考ハ考ハるあしこし  
世角も考ハるあしこし  
又考ハるあしこし考ハるあしこし  
うらひの考ハるあしこし

系  
友我  
考  
考  
考

うらひをばらうや契かうらふ節

うら

書

法之

右の平らま書物の中

書

信貞

義乃らうらま書物の中

書

以良

是れ新らま書物の新り

書

道高

うらひをばらうや契かうらふ節

書

右忠

是れ新らま書物の新り

了書

宗時

うらひをばらうや契かうらふ節

書

久義

是れ新らま書物の新り

尚忠

是れ新らま書物の新り

書

信元

是れ新らま書物の新り

書

昌香

中書物の中

書

信元

是れ新らま書物の新り

書

信元

是れ新らま書物の新り

書

信元

是れ新らま書物の新り

書

信元

是れ新らま書物の新り

書

信元

是れ新らま書物の新り

書

信元



号此ふあを法花經の花中か

實名

式

十二迴忌遊音

初約系もろくくひとの法華經

斤相

良保

号如社和しりりまき此法花宗

根名

每的

八情して

号此ふあや八まん信經義

慧山

安助

号の經義あまや義の中

系

友我

号乃あまも也道此り人法華

岸

如貞

号山の号此經ハ可部ガカ

友

右時

号のこもろく人結經の初巻外

毛岸

正春

くくひと此義やお經の箱柳

栂山

保友

号を梅の經よ先難波寺

月

くくひとの經よく持くみくの院

安助

南約如ちあま

号此ふあや法花經さくし

春泉

あまうらら号や法華宗あま

正忠

ふらの花はあつたくもやの雪

左 右

夕霧

うらひまのあわもあつたくも

左 右

利政

まらり木もあつたくも

左 右

貞好

あつたくもあつたくも

中 修

孝業

あつたくもあつたくも

左 右

貞実

あつたくもあつたくも

左 右

元貞

あつたくもあつたくも

左 右

三次

あつたくもあつたくも

左 右

卜傳

あつたくもあつたくも

左 右

瑞節

あつたくもあつたくも

左 右

俊作

あつたくもあつたくも

左 右

保友

あつたくもあつたくも

左 右

安助

あつたくもあつたくも

左 右

正室

あつたくもあつたくも

左 右

友室

あつたくもあつたくも

左 右

耕雲

あつたくもあつたくも

左 右

政重

うらひとて梅の北窓連環

系 一井

雪のほろじやみよのうら梅を

系 友我

お梅もや拙酒の金取を

系 梅盛

能きれ花やとらや金取を

系 千貞

うす雪ふ上毛もさうし金取

系 後継

教りくわふかうら金取を

系 色房

啼ゆとらうらんのかれを

系 白刺

雪の梅の蒼やうらうら

系 長鶴花

雪のむくもさうし金取を

うらひとて梅の北窓連環

雪をむ後の出仕たるれを

雪も乃さふ

白梅も怒るらんし金取を

うらひとて梅の北窓連環

雪の品を好態を端し金取

又雪の教りけ雪のほろ梅

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

考の録目のも富士の境

梅

お雪あふすこの地も梅のむ  
さくら枝のお梅あつ目乃葉  
名お妙ひく人のおよも梅花  
わらう此洗のまらう梅の花  
梅のちしめくまらうさ  
本の母とあつひ初く花は

考の物はのむくく梅  
鼻の元じわあまらう白ひ  
毒の香とあつらもせ花の園  
梅えの南へさく日差の  
お梅の花をむくさの朱傘  
考の梅のさくら目貫か  
毒の香やとりん柳のさくら  
考のふて人ら梅乃白ひ

うらひの秋のそよよの梅  
 春風のりそよ梅のうらひ  
 花乃中此ゆらさしこの傷方梅  
 雲の因らそくハ梅の本此芽水  
 新近き梅の香のくやうらま  
 新井の毒ハ物作の白ひりか  
 梅の枝やうかう十ふま  
 ちの紅粉の梅のうらひ

一 雲のあまうらひの梅のうらま  
 長そよふらう梅花の  
 梅毒やも遊人の自所毒  
 香気余亦人やう梅すま  
 春梅の風ハそよとそよ梅  
 少り梅の雪や梅花の香包  
 多し梅のうら一青梅の梅乃花  
 梅のうらひのうらまのうらま

南枝よりむきし梅のさくら  
 咲たの身籠鉢らしや梅のま  
 むねやじりやう梅の垣がう  
 梅も今思香らんさあやうは  
 信初く白ふや梅のりまこ地  
 縁木少しほやさふ子は花の元  
 すうかてとじりさう花の宮  
 ちりりせいたの花の流る毒は所

あゆめやうらやうくさる梅の  
 号の未帰や月日記り毒  
 一花并く梅や柄香灯をた  
 梅えいどのの暦の算あうか  
 毒さちやうくしを神のまんと  
 本あらしやうかいらる梅さ  
 日らうようきんさひ梅の花盛  
 新毒さしあてあつたは完



乞乞尾別名續屋伊友  
 一葉具七葉として六酒所  
 林母まふて人この中を  
 けふまふりりりりりりり  
 林の臺形のそとをみり  
 お移りも似る梅の毛と祀  
 是れは世に七葉と云ふ  
 是れは世に七葉と云ふ

人ぬいあ〜と〜と  
 梅すきや海も〜この花の  
 花柄と作りら〜人ぬい〜花の  
 梅の文は花の匂ひや〜と節の  
 梅の文は花の匂ひや〜と節の  
 梅の文は花の匂ひや〜と節の  
 梅の文は花の匂ひや〜と節の  
 梅の文は花の匂ひや〜と節の

若葉具五歳 正治  
 十歳 長沙  
 八歳 良富  
 八歳 友交  
 正治  
 正治



梅はかなこね湯まのとりりか

園守

政次

はかの花はそくい梅乃すふりか

了善寺

文解

みる自らあなるんりやじあふ

了善

助善

多と香と目と鼻りて梅花

了善

勝明

じ然とつや先とる人つる梅を

了善

玄哉

じあはよととああつらあつら

了善

重信

梅と香とりんのりと花もつた

了善

重信

うけつじちや霧面意の毒

了善

後文

久重新くえ咲や丸徳の意梅

了善

後文

意の梅や入くじ枝と浮子骨

了善

政守

紫がく大空の梅と

了善

古時

あけあハ梅花やうつ大徳

了善

古時

同一園中くつりし時

了善

貞利

おろろるともあつし此梅園外

了善

貞定

香とくし梅とくふ花やあ

了善

後文

多嶺の神やかさり此軒の毒

了善

後文

つゆのさぬきんかきつゆの梅

利政

紅梅や竹河より白くも

夕暮

ふとせとあきあきくの花

良和

紅梅のさや鳥乃魚のさき

之留

梅乃木か生さくひら梅と

みく

さるふりき紅梅や二本の

赤乃

紅梅や難波歌中此うのさ

一系

梅仙譜

難波清と少りてうさ梅

善次

梅とゆてふはるふのさ

重純

難波ちのぼる梅は所

良勝

水田の花やゆは梅は所

貞房

きりさめももさ下傘梅は

如貞

花はてりこの木あは梅は所

夕暮

花軍はらり梅は所

善次

とくしんりき新伊ハやう梅のむの  
まてしんりや新かハ錢毒の法  
繩少しりる御う梅のよりき  
やう梅おあつる臆病風りり  
まを鼻う錢じりうえは毒の色  
錢梅をすまの法うきぬる色  
はく梅とみる錢梅の法り  
錢梅より繩とがるやう月取

新 伊 信 中 浦 義 奇  
吹白 夕新 多葉 康勝 赤負 水之 政忠 李英

やう梅のきくみるあおやう  
錢毒れはきき本やきもはきぬ  
御う梅乃きりるを花やつら  
くふ本おむ錢毒やあうき  
錢梅ハあまき新のきか  
む和とみ梅をそ二り  
難毒ハあ東まあう日  
すくあう梅のきくも新

新 伊 信 中 浦 義 奇  
貞房 貞祇 政信 貞宣 為成 中重 一舟 赤如

梅もらや新生もすくみ花ん

長次

若梅の花も少なりうも深

蓮色

又とぬじ本かいらえさけ花は高

月

うと花は好又本方れり此小

毎延

梅のさくらおてい腰かさる身

長務

花れけす志やう相梅の枝

改位

うとさくもさくもさくも此梅花

心如

さくもやすさくもさくも此梅のらん

公勝

春色はさくもさくも梅と物花ん

良勝

や梅もやさくも梅花のさく

長乃

けさくも梅花の繪巻

正伯

玉洞の春さくもさくも梅

威雅

細切乃正月やさくも梅

玄利

年此頭つさくもさくも梅

保友

雪のうさくもや御製梅

伊人

雪のうさくもや御製梅

乃長

難波女の花乃わのきやう

浦

室和

ちやくとくもきりむき

浦

綾成

はきりやうきやうのき

松

守牛

きりたと縁をいさ

松

長色

花乃き風のかきやう

喜

守牛

きりたを今きやく

中

伝

そく乃あや目星わ

松

白

きりた此梅乃庭や

松

保友

楊かきらわ

松

在

あき乃八風日

松

由

花とさう目と

松

由

古曆とせん

松

清

むくむくわ

松

之

うらひとえ

松

一

古年のこと

池

角

梅と生

池

角



物化もまはる梅はたのむるに  
家とあえし句ひもじき梅は花

風化篇也

しきそ流人形鶴乃梅の句ひ  
空もそまぬ好文本はくひひ  
新釣のまも句ひや梅の句ひ

筆澤友近其人の句ひ

あらう時

松竹も梅乃妙なりひも妙なり外  
ゆひ討てえゆぬ梅の地なり  
梅さけを詠ねるぬ人

山登り万句を詠也

伝の道へ進もそと梅のまら水  
とらわくそちうすか枝の端も梅  
花乃常流のゆも端も毒

六十一

お梅や右近乃ちくろをれし小種  
数百年の経毒やまじき人  
御り梅の大名竹の地所か  
梅の枝のやをきろらとちて  
〃 〃 〃

りよとて

おのけりやう梅の毛えお  
御り梅の毛えやけり  
数の中も味や種梅の方所  
〃 〃 〃

御り梅の毛え此茶也川竹  
やう毒也種やうやう月乃ら  
風乃ちくやう此梅や味も花  
たう梅の毛え多初は難治奇  
金銀也を佛とまらや梅は所  
まは花も能やうも毒は所  
あやうき花もさひ梅は所  
先とや乃病也えさけ梅の毛  
〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃



鐵冠たうおしあまもや八津の  
 高梅の西るや堂へよき此勢  
 梅淡花もすうらも法女のら  
 津とんやま梅らよも花盛  
 〃  
 〃  
 〃  
 〃

春水付去雲水参る

とけてよじふ水もぬえん  
 おとけく凍と水や中をわり  
 月乃脚へ水のむきや踏らうり

各河お妙るやまのそくらり  
 去も水のあもさうさぬ水成  
 氷消く勢と流あつちまらふ  
 美乃日のあさうくくく水成  
 美けくちあさけゆくい為水  
 時あうてまの水のとけりつ那  
 せいらふ流りとしらる水うか  
 若うたけぬ水あふの勢

高 正 高 明  
 高 正 高 明  
 高 正 高 明  
 高 正 高 明

火の平と結してまきけぬ水  
 御りも此水清き流と目驚か  
 能き井やるせ水のたゆりち  
 朝乃清すふおそけ新やうさ  
 新水の瀬乃つらつらうの産湯水  
 餘は長舌身乃おしち舌を  
 水やうらうらむむとらあ〜水

一とと神一人ちり  
 長頭丸

正知  
 及務  
 志昌  
 右治  
 貞房

春雷

一樹乃高遠く一河のちんし水  
 まゆら妙の書や一樹乃けりさ  
 餅書ハハ一海りれとらまきり水  
 妙手書はた海人のま日乃水  
 ぬりうあつわもややうらまき書  
 ちりまよま紀よのちりしまき乃書  
 風乃ややり一火をれやまき書

深尾  
 物保  
 友我  
 保友  
 正心  
 俊秀  
 貞利



春歌

長き日の新し細かき雨を

後活

新法

死か望とらふやたき木此結の場

貞堂

さきかほ新し結よよと海

長森

あはれか望み望みの場

貞堂

あはれか望み望みの場

貞堂

あはれか望み望みの場

貞堂

へ

100452

